

(論文)

「観光倫理学」の提案

A proposal for ETHICS OF TOURISM

上野 正二

はじめに

「観光倫理学」というと、ひとはこれを観光業者の最低のモラルのカタログと思うかもしれない。だが、そんなものではない。^①

たしかに、「政治倫理学」「教育倫理学」「医学倫理学」というものがあり、我が国でのこれらの取り扱いは非道く、医者は患者に対して〇〇をしてはならない、教員は学生・生徒に対して××をしてはならない、といったことを定めるのがそれだ、と見なされている。そのやり方で言えば、「観光倫理学」とは、ホテルのメイドは客の持ち物に手を付けてはならないだの、プロステイチュートの業をしてはならない、などということを論じる学問だ、ということになるだろう。しかしながら、「倫理学」とはもともと *eudaimonia* の訳語であって、それは「人間の行為」の考察を通して「人間の居所をよく考える営み」を意味していたのである。

してみれば「教育倫理学」とは、いわば「倫理学」の扱う行為の領域を「教育」に限定した応用倫理学であることになる。これは、つまり「教育」という営みを通してひとは何を現実しようとしているのか、何を目的として教育は行われるのか、ということをよくよく考える営みであることになるのである。

そうであってみれば、その意味での本来的な「観光倫理学」というものがあるとしたら——残念ながら筆者は仄聞にして、未だそう

いうもののあることを知らないのであるが——これは観光という人間の行為を通して、それがどのような志向空間にあるのかを熟慮することを意味しているということができる。このことがもし誤りなく語り得るとするならば、行為の学である「観光倫理学」こそが、他ならぬ「観光学」^③であるということが出来そうである。

そして、このように人間の営みの一つの種類であるところの「観光」がいかなるものであるか、いかなるものであるべきか、が明らかになったとき、そこからはこのあるべき形を損なった観光は、観光の類落態として語りうるものとなる。同じくまた、あるべき目的に向かわぬ観光 (*stagnant seeing* にせよ *tour* にせよ) の主体を補助する立場に立つ「観光業者」の仕事も、同様に人間的働きの類落態と指摘されねばならないことになるのである。

このようにみると、どうしてこんなにも愉しい学問が、これまで学問として取り扱われて来なかったのかと、筆者には不思議に思えてくる。だが、世人には少しも不思議ではないのである。あの愉しくて仕方ない「教育学」や「教育倫理学」を、論者たちは何とも退屈な仕方ではか論じ得ずに居るのだからである。

これだけのことと言えれば、後はアリストテレスの『ニコマコス倫理学』のやり方に倣って論の展開をすればよい。もう作業は八割方済んでしまったようなものだ。

註

1、この観光倫理学という名の観光学は、「いさえしなればよい」という犯罪の一步手前の低い低い要求を書き並べる倫理学とは異なり、高い要求をひとに突きつけることになるであろう。しかしそれは、見方を変えれば、かく観光を行い、かく観光業に携わればまともな人間的

な生活、幸福な生活を送ることができるといふその方途を示すものもあるのだ。

2、本稿を書き上げて後、ある大学の観光学部において「観光倫理学」が講じられているのを知った。ただし、内容はなお不明である。おそらくは右に触れたように「教育倫理」がこの国では教育関係者の守るべき最低限のモラルを指すように、「観光倫理」も右のようなものとされ、そのこけおどしの体系を「観光倫理学」というのであろう。この差異は、英語表現をしたときに筆者の「観光倫理学」は *Ethics of Tourism* としか言えないところを、*Ethics in Tourism, Ethics for Tourism* といったものになるところにも表れる。

3、「観光学」「観光論」を問う方法の別解として、上位の学を見定めてそれを限定するという方法もある。むしろこの方が正道であると言える。この場合、上位の学が存在するのかどうかが問題である（現代レジャー論では残念ながら、学の原理となるものを追求するという作業が欠けているために、学たり得ない。そもそもレジャーの概念がアリストテレスらのものとは変わってしまったている。その点、J・ビーパー『余暇と祝祭』（講談社、稲垣良典訳）を参照されたい）。

要するに、観光論はレジャー論の特殊学であるということだ。なぜならば、その対象としている観光は、レジャーの一部と言えるからである。レジャーと呼ばれるものを列挙すると、ひまつぶし、新聞を読む、テレビを見る、旅行をする、ショッピング、音楽鑑賞、美術鑑賞、演奏会、華道、茶道、ギャンブル、宗教活動――

さて、このレジャー論、閑暇学を展開するためにも、筆者が本稿で試みた方法が有効であろう。それはつまり、レジャーと呼ばれるものの中に含まれている共通要素を引き出して、それが人間の行為の本来の目的を達成し得るものであるのか、それとも狙いはまあ良いの

だが行為主体であるそれぞれの人において視野狭窄があり、彼らがジタバタすればするほど錯誤は深みに嵌って行くそういうものであるのかどうかを、弁別して行くという方法である。その際、西洋諸国には余り見られなくなっているが我が国には伝統となつて今なお盛んな様々なレジャー分野が残っていることを大事にして、考察の方向を過たないようにしなければならない。

問題なのは、いま右に挙げたレジャーの一覧表である。ここには後に頽落態と呼ぶことになるほとんどのレジャーと、最後までまともなものであり続けるであろうそれとがある。後者とは、単に形骸がドライフラワーのように残っているだけでなく日本文化の華として、いままなお脈々と受け継がれ文化活動を続けている華道、茶道、香道、各種芸術、弓道をはじめとする幾つかの武道をそれとすることができる。

とは言つても、家元制度の元でかろうじて生き残っている若い女性の花嫁修業のほとんどや、「宗教」と一括りにされているものは、これを取り扱うには要慎しなければならない。そこには形式を守ることが「形骸化」となり文化の創造性が欠落している、という指摘も可能であるからだ。しかしながら、それでも、人間の個体発生は系統発生を繰り返すのであるし、しかも人間の精神の事柄は「守・破・離」によつて完成すると言われても、先ずは守るところから始めざるをえないのだから、先人の跡をたどることから始めざるを得ない。いずれにしても、これから「観光倫理学」で論じ残すほどのものならば、「行持」として特別の取り扱いをすることが出来るのである。「茶道は、茶室にある時だけが茶道ではありませんぞ、日常茶飯事が茶道でなければなりません」というようなことは、裏表なしに入門において教えられることがらであろう。剣の極意は、「日々油断無きように」で決まったということがある。弓道は弓を持つても持たなくても立ち居振る舞

いが弓道である。そんなことだ。これらにあつては、まさに意識の働いている間、人は行為の究極目的たるものに直面していなければならないし、そうしているのだ。

第一節 観光、ツーリズムとは何か？

ここでは、論の出発点として、観光、旅、ツアーといったものが現代人においてどのように論じられているか、古今の文献にどのような関連が見られるかを、出来る限り広く拾い上げることにした。アリストテレスもそうやってるように、学問の始まりはその事柄についてどのような事象が存するかを可能な限りに洗い出すことである。可能な限りに具体事象を見ることである。そして、次にそこに通底する原理的なものが何であるかを突き止めるために、各の事象を腑分けして行かなければならない。

(考察の対象)

その際検討対象となるのは、先ずはこの行為を為す者の主体的な側面である。行為の何であるかを示すのは、この行為の意図であり、その目的である。すると我々が拾い上げる観光の事象としては、何らかそのような意図を持ったものであることになる。

また、他方「観光」や「旅」そのものではないが、観光や旅に関わる人間に対応する人々の営みがある。ちょうど健康志向者に対して、健康料理、健康運動を教えたり手助けする者（こちらの方は、ほとんど問題はないようである）がそうであるところの、観光業者たちのことからである。今日のように国家の所管として「観光庁」が置かれれば、その役人たちがそれであるし、ホテルのオーナー、支配人、メイド、料理人にいたるまで様々な職種があり、またそれらの観光業務を支持する地域住民というのもここに関わってくるの

である。この人たちの意図もまた考察の対象にしなければならぬ。

ところで、このような仕方で観光行為を考察する際に、論者は間違つても「観光やツーリズムの定義が定かでない」と嘆いたり、詰まりよのない仕方で定義を試みたりしないようにしなければならぬ。佐竹真一氏に「ツーリズムと観光の定義」という論文がある。そこで氏は「定量的な研究を進めるためにはそこに使われている用語が一義的なものでなければならぬ」と言うのだが、一義的な仕方で定義されたとしても、それが人間の営みとして論じるに値しない一面的な議論にしかならず、本来その意味の解明から始めて我々の観光の営みを意味豊かなものとする作業とならないならば、紙の山と疲労だけ残る虚しい業として放棄しなければならぬ。同じように、議論を論者の手に負えるようにするために、その手のレベルの事象、情報のみを蒐集するという考え方も止めよう。なぜならば、このような研究態度からは、我々が本来目指さなければならぬ。「観光を存立させる最も重要な要素、それなくしては観光の営みも、観光する人間の存立もあり得ない或る者」などは少しも考察に引掛かって来ないのである。そういうやり方ではなく大いに閑暇を得て、落ち着いて文献を探せば、思わぬ所にいろいろ重要な情報があるのが見えてくる。

そういう訳で、本稿の「観光」という語には、「旅、旅行」、「光（かけ）を観る」= sight seeing、「廻国」= tour^②などを含めたありきたりの人間のレジャー行為だけでなく、これらの用語にさらに「道」や巡礼、遊行といった言葉を付け加えて、言葉を手がかり足がかりとして、考察を進めて行くことになる。

(観光事例の収集)

① A君がこれからバリ島観光に出かけると言っている。その意味する所は、そう難しいことではなくて、彼はこの三年間コンピュータを操作しながらも大いに脇目を振って、仕事に精を出してボーナスもしこたま貯め込んだし、可愛いらしい女性を伴侶として射止めて、世間というか彼の友人たちのやり方に倣ってというか、新婚旅行というこれまた結構なことを企画して、その形式の一つとして観光旅行を、そして行き先を含めて「バリ島観光に出かける」という次第なのである。

事例のトツプにお目出たいところを持つてきたのだが、新婚旅行があがれば、教室の学生たちだつて修学旅行、研修旅行、卒業旅行と続けてゆける。ただしこれらの場合、それらの観光とはどういう営みだと言うことが出来るかを、後で洗い出さねばならないのである。

② 次に、最近たまたま聞くことが出来た観光業者の話から

大分県別府の観光ホテルのオーナー^③によれば、「観光とは、手短かに要約すると、自然、歴史、文化である」という。これは、言い直すと、観光(という行為)の対象は、自然、歴史、それに文化だ、となるだろう。自然が対象であるというのはよく分かる。観光は英語で sight seeing というように、「自然の景観を見ること」が先ず何よりも先に挙げられるであろうからである。別府は全国一の温泉地でありそういう意味での自然をふんだんに観光の為に提供することが出来る。おまけに、今や中山間地だからといってもこの田舎にもあるとは言えなくなった棚田の風景までここにはある。では歴史が観光の対象であるとはどういうことだろう。直ぐ先に挙げた温泉という自然は、千二百年ほど前に鶴見山が噴火した際に湧出する

ようになったというような話があったり、別府の人々はただこの自然の猛威に畏怖するばかりであったのだが、一遍上人が遊行の途次立ち寄られて地獄を極楽に変える方策を教えられたという話があったりする。そういういわゆる歴史事跡を学ぶのも「観光」の醍醐味の中に数えることが出来るのである。さらに、文化が観光の対象になるといふのはどういふことだろうか。それは、一つには地獄を極楽に変えて住み続けた人間の歴史も一つの文化として考えることができるし、さらに別の面では単に過去の遺産を食いつぶすだけではなく新しい文化として(実際彼は温泉宿泊芸術祭のようなもの)別府八湯温泉泊というものを)企画推進している。

③ この別府の事例では、我々は一步踏み込んで、別の観光の側面を捉まえることも出来る。たとえば①グルメ、②地獄観光、③温泉浴、④路地裏交流、⑤? といったものである。温泉浴は怪我を初めとして気鬱まで病を癒したりするので「健康」「癒し」といったものを目的に挙げることが出来る。それだけではなく、路地裏でも湯の中でも観光客同士でもまた地元の人間とも新たな人間的な出会いの場を提供しているのだ、と言える。人間の出会いというのは、それ自体が人間の癒しにもつながるし、また文化交流の橋渡しにも役立つっていると思われる。

この点については、これも後に記すべき事であるが、幾つか問題になる論点がある。

④ Bさんは、定年を迎えて会社を退き二十年ほどになる。毎日が日曜日のような生活をしているのだが、在職中から裏山の蜜柑園を管理することと日本の各地を旅行して回ることが趣味となっていた。退職後は三年に一度ぐらい外国旅行にも出かけ、中国に二回、韓国に二回、東南アジア、フランスにも行った。しかし、外国語が

出来ないBさんには外国旅行はしつくりするものがなく、もう行くまいと思っている。しかし国内旅行は一年に二三回は出かけている。彼は大分県の住人で、四国が目の前にある。それで四国霊場まわりを発願して昨年満願したところだ。金も随分掛かるだろうに何故そんなに旅行するのかと訊いてみると、「それはじゃなあ、農らが地元にはかり居ると地元の善さが分らんので、余所の土地を見て回るんじやよ。僕は会社に出ておった時も蜜柑山の仕事をして木を枯らさぬようにしてきたが、特段の感激というものを持ってやって来たわけではなかったんじや。それが、まだ若かった三十過ぎぐらいの時に青森に会社の用事で行ったんじや。ちょうど秋で汽車の窓から一面のリンゴ畑が見えた。リンゴはどういう作り方収穫の仕方をするのか見てみたいと思つて、仕事が済んだ後で二日休みを取つて観光りんご園に行ったんじやが、いや、あの時は感激した。リンゴ狩りの走りじゃったんじやな。それで思つた。家でも蜜柑の収穫時期なんじやが、青森のリンゴ農家の人が来てみたら、僕と同じ感激をするんじやなからうか、と。人は自分の生活だけ見て居ると、それは本当はすごいことなのに当たり前と思つて、その生活の価値を認められなくなっている。刺戟じゃあ、日常を非日常に変えるための刺戟を貰いに出かけるんじやよ。お金には換えられぬ」。

⑤ ③にすでに触れている部分を含むのだが、はみ出す面がある。Cさんにとって観光とは自然の中に美を認め心を震わせることであり、また人間たちの生活形態を知りその人情に触れることによつて、自分の感性を豊かにすることを目的とするものであると考えたらしい。

⑥ 企業戦士として二十年働いてきたD氏は、四十歳を越えて身体が重く感じるようになった。精神的にも気の晴れない事が多く戦線

離脱を考えはじめた時、G・ツーリズムというものを知った。気候が温暖だという点と色々な田舎暮らしが体験できるというので、値段が安すぎるのが気になったが、杵築天国園というところに予約して出かけた。当座二泊の予定が、居心地が良いので二日滞在を延ばすことにしたが、結局は五日間留まった。

オーナーは元々の土地持ちであつたのが定年退職をして、民泊をはじめたという。最初はその天国園という広い農園を見て歩き、翌日は二十アールの水田に案内された。果樹、野菜、稲はいずれも無農薬、不耕起栽培というので、ガソリンを使う機械は草刈り機だけだと言う。二日目の夜、オーナー夫婦と同じ食卓での食事の際、オーナーの話はDには気になる話だつた。彼が疲れているのを見て取つたのだろうが、田舎暮らしが伸び伸びとしていると言うDの言葉を受けて、いや、都会だって同じだ、勘違いしてはいけない。ただ、都会でノンビリ暮らすには少しこつがあるんだ。それを学んで行くがよい、と言う。天国はここだけではなく、人間の居るところはどこだって天国なんだ、と。一度自分自身を見る目が変わつたら、田舎の木々の見え方も変わるし、都会の路も樹も建物も、人々すらも別の見え方をする、とも。

⑦ 小説から材料を拾つてみよう。ジェイン・オースティンの『マンスフィールド・パーク』で主人公のファニー・プライスが従兄と窓辺に立つて外の景色を見る場面がある。それは一種の *soft seeing* 観光である。彼女は歩き回るわけではないが、景色を見ることに在る意味を見いだしている。

「雲ひとつない夜空にきらきらと星が輝き、森の深い暗闇とあざやかな対照を成し、厳肅だが心を慰められる美しい光景が目の前にひろがっていた。ファニーは思わず自分の気持ちを口にした。

『ここには調和があるわ。安らぎがあるわ。絵や音楽では表現できないもの、詩にしか表現できないものがあるわ。人間のあらゆる悩みを静めてくれて、人間の心を喜びで満たしてくれれば何かがあるわ。こういう夜の景色を眺めていると、この世に悪や悲しみなどあるはずがないと思えてくるわ。人々が自然の崇高さにもっと目を向けて、我を忘れてこういう景色を眺めれば、この世の悪や悲しみはもっと少なくなるはずよ』(ちくま文庫版七四一五ページ)。

⑧ トルストイの「二人の老人」におけるエルサレム詣
巡礼の旅というのは、ツーリズムの形としては古くからあり、しかも典型的なものだと言えよう。

さて、この作品では金持ちとそうでない二人の老人がロシアの田舎からエルサレムへ詣でる旅に出る。金持ちである老人エフィムは金の始末に気を遣い、もう一人のエリセイは神の意志を尊重する方に気を遣っていた。五週間以上歩いた辺りは小ロシア人の国で、そこは旅人を歓待して、泊まるのも食べるのも金を受け取るうとはしないという処であったが、次第に飢饉の地域になってからは、泊まるのは泊めてくれたが食い物は出して貰えなくなった。その頃、エリセイは水を飲み立ち寄った農家のあまりにも酷い状態に黙って通り過ぎることが出来ず、穀物を買ってきて炊いて食べさせ、馬を買戻してやりといった世話をしているうちに旅を続けるには持ち金が足らなくなつて、そこから引き返してしまう。エフィムはエリセイを待つがなかなかこないの一人で先を行き、ひとりでエルサレムに着いてしまう。ところがそこで不思議なことに、辿り着いているはずのないエリセイが教会堂の祭壇の元に居るのだった。これは実際に彼にあって話をするというような確認がなされた訳ではなかったが、或る大事なことを象徴しているように思

われる。巡礼の旅の目的は寺院に詣でて祈りを捧げること。それを果たしたはずの金持ちは、道中も神のことは頭から無くなるほど財布の心配をし、「足では行ってきたが、魂では怪しいもんだ」と述懐するはめになる。

⑨ 芭蕉の旅の思想

芭蕉が『おくの細道』の冒頭に、「月日は百代の過客にして行きかう年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思いやます」と書いていることは、よく知られているところである。彼は自然の詩人だと言われる。『笈の小文』に、「山野海浜の美景に造花の功を見」という言葉を見つけてはそのような見方をする者が多いのだろう。しかし、その『笈の小文』は、「山野海浜の美景に造花の功を見」るに止まらず、「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、其貫道するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり」(『芭蕉紀行文集』岩波文庫、六九一七〇頁)と述べている。

⑩ 禅仏教的見地に立った ツアー論
芭蕉の場合と共通する見解が多いと思われるが、禅仏教の修行者たちもよく廻国している。その場所の移動がたとえ一つ隣の谷であつても廻国としての観光論を認めることができるであろう。

そのむかし、唐の時代の隣国で、百二十歳まで生きた趙州という坊さんが居た。彼が雲居という僧に遇うと、雲居が言った。

「和尚さん、何をそんなにうろついているんです。いい年寄りがうろつき廻らずにどこかに落ち着いたらどうですか？」

「どこに落ち着いたらいいのかね。」

「この山の麓に、古い寺の地所があります。」

「お前さんは、なぜそれを自分のものにしなないんだい？」

後に趙州が雲居のところに行つて、その和尚に会うと、和尚が言う。

「年寄りが何をそんなにうろついているんです。もうすつかり歳をとつたのだから、落ち着いてもいいでしょう？」

「どこへ落ち着いたらいいのだ？」

「この老僧は、呆けて、自分の居所をわからんわい。」

「わしはこれまで三十年という長い間、馬を扱つて暮らしてきたが、今日は一頭の驢馬に蹴られたよ。」

〔鈴木大拙全集〕第十二卷二九九頁

趙州和尚の、廻国は僅か隣の寺に出かけるほどのものでしかなかったかもしれない。何せ、彼が六十過ぎて禅の修業を始めて三十年経つた頃のことを言っているのだ。しかし、それにしても、趙州の見所は的確だ。これに比べられるのは、先に紹介した『マンスフィールド・パーク』のファニー・プライスぐらいなものかもしれない。

雲居が「和尚さん、何をそんなにうろついているんです。いい年寄りかろうつき廻らずにどこかに落ち着いたらどうですか？」と訊くのは、私がツーリスト諸君に「何のためにうろつき廻るんだい？」と訊くのと同じだろうか、違うだろうか？

雲居は、こう訊ね、趙州は「どこに落ち着いたらいいのかね」と

問い返す。彼自身に用意されている「其処」のことをこの若い坊主は分かっているのかと訝りながら。

⑪ 序でもう一つ別のものを上げてみよう。

南泉和尚に陸亘という役人が言う。

〔肇論に〕天地と我と同根、万物我と一体とありますが、驚くべき言葉だと思えます

南泉は答える、

「時人見此一枝花、如夢相似」、つまり「お前さんのこの花を見るのは、夢の中で見ているようなものなんだなあ」と。

これは『碧巖録』第四十則に出てくる問答である。ここにはもの見方の問題がズバリ示されている。肇論に言うところの「天地と我と同根、万物我と一体」は陸亘大夫に言われるまでもなく凄いと表現しているのだが、では陸亘はそれをソレとして体得できる人物であったかという点、そこが怪しい。『碧巖録』は、教えの言葉とそれを体得することのギャップを指摘しているのだ。

それでは、この一株の花を夢の中で見ているような見方ではなく、ありのままに見るとはどういうことなのか。陸亘も南泉和尚の指さした花を見ている、現実に見ている。それでどうして夢の中で見ているようなものと言われるのか？夢の中の花は、それが「在るがままに」見られるのではなく、夢見る者の意識がただ掴んでいるだけのものである。では目覚めた状態でふつうに人が見る花は、どういうことになっているのだろうか。

⑫ 最後に廻国のとどめといつてもよいであろうものを挙げる。それは、日本仏教（といえば大乘仏教の最終的發展形態であるといえる）のさらに究極的な形と呼ぶことの出来る時宗の創始者で遊行上人と呼ばれる一遍における廻国、すなわち「遊行」である。その内

容は何であつたろうか？

浄土教は、法蔵菩薩が衆生済度が成就しない限り自分は成仏しないと誓つた、という『無量寿経』の説話を元にしてゐる。しかし時代が下るに連れて、救いの対象とされる者の条件が緩和され法然・親鸞では悪逆な人間でも一人残らず救済に与ることが出来ると思つた。しかるに、一遍はこれをいきなり三歩も飛び跳ねて、念仏したならばなどの条件さえ取り外し、念仏そのものの力により万人が救われて居るといふ見解を広めるに至る。すなわち「決定往生六十万人」を直指して念仏を勧め念仏札を配り歩いていた一遍は、信心が起らないのに札を受けるのはまやかしだと拒否する僧に、信心が起らずとも受け取るように勧め押しつける。後にこれを正当な行為であつたことを確信するといふのである。

やがて彼は、後に続く者たちにすべてを棄てて歩くこと（遊行）を教え、率先して歩き、生涯を終える。

⑬ ツアー論の原理的文書と呼ぶべきものを、ここに止めとして持つて来なければならぬ。それは禅仏教や浄土系の思想がこれを踏み台にしてゐるとも言われる『老子』である。先ず第二十五章に、「物有り混成し、天地に先んじて生ず。寂たり冥たり、独立して改らばず、周行して殆まらず。以つて天下の母と為すべし。吾れその名を知らず、これに字して道と曰う。強いてこれが名を為して大と曰う。」とあり、また、第四十七章では、「戸を出でずして天下を知り、牖より闚わすして天道を見る。その出ずることいよいよ遠ければ、その知ることいよいよ少なし。ここを以つて聖人は行かずに知り、見ずして名かにし、為さずして成す。」とある。

「周行」「行」がtourと訳され「旅」と訳される言葉である。

⑭ 学生に尋ねると面白いものを挙げてくれる。イ、確認旅行と称

して、雑誌やネットで見たきれいな風景を見て、「あれだ！」と確認するのだそうだ。ロ、写真撮影旅行は純粹芸術的なもので、作品制作のためだという。ハ、傷心旅行は、失恋の痛みを大事に抱え廻すのかと思つたら、痛みを忘れるための旅行だそうだ。

⑮ 本稿制作によくぞ間に合ったと喜ぶべきか嘆くべきか、二〇一三年四月二十四日、NHKは、観光庁が東京にカジノを作り観光客を誘致すると発表した、と報じた。

⑯ その他にも、カインの言う「逃亡の放浪」（『創世記』4:14、2:2）という当初よりマイナス価値の旅もある。またわがペドロ・カスイ・岐部のような死を覚悟した旅もある。ただし、彼の場合は、その向こうに栄光を見ていたと言わねばならないだろう（遠藤周作『銃と十字架』）。

註

1、「大阪観光大学開学10周年記念論文集」所収。

2、佐竹氏は英語の *tour* はターンをして戻ってくることを前提して使うと言つが、そういうせせこましい見解では本稿の取り上げる芭蕉や一遍、さらには老子も取り落とし、まったく形骸的な一部の〈足のついたレジャー〉しか対象としえなくなる。

3、つまりニューツルタの鶴田浩一郎氏であるが、氏は厚生労働大臣表彰、総務大臣表彰、経産大臣表彰など華々しい活躍をしておられるらしい。

4、「自然に即して生きる」ということは文化の最上級のありかたであるといえるのだが、ここではどうだろうか。

第二節、ツーリズム現象の洗い直し

さて、以上の①～⑯に対してどのような働きかけをすれば、我々

はここから「観光」を通じて人間に本質的なことから突き止めることが出来るだろうか？上にあげた観光、ツアー、廻国の事例に対して、問題点のあるものにはそれを穿き出し、そうでないものに関しても何が本質的なものであるのかを突き止める準備的考察を加えることにしよう。

① このA君の例において、「観光」という行為は、これが当に行為であるといえるための行為の「目的」を持ち、またその目的を達成するための選択肢の一つである、ということが出来る。「新婚旅行」という名前のツアーが何を意味するかは、これは常人だけが知っているというほどに難しいものではなく、一般化することが出来るだろう。新生活の始めに当たりこれからの生活設計をじっくり練ったりするには、新居に居た方がよいに決まっていようと思う。それを取ってこの時期に遠出をするというのは、要するに世間での流行を追いかけるか流行の先端に行くかの違いがあり、そのいずれであるかに応じて詰まらぬプライドの高さが測られる訳だが、だからこそ、「名誉」が目的として目指されているし、間違った仕方ではあるが、彼は名誉を手に入れることを以て「幸福」が手にはいることと見なしていることになる。

そうしてみると、これに類する①に名を挙げたものはいずれも幸福をめざしての旅と言えよう。ただ困ったことに、彼らのほとんどは束の間の「幸福感」を味わうことは出来るとしても、「幸福」を手にすることは出来ないのだ。

② ②でのこの新しい別府温泉の観光事業を企画する人たちの行為を分析すると、彼らの企画の構造も、やはり企画者自身および観光客の幸福実現を目的としている、と言うことができる。そして、観光客の側における観光行為は、先ず温泉という資源を目的にする者

については、入浴によって健康の保持増進を図ろうとするのである。また一時的ながら快適な汗を流すことを目的とするのである。地獄巡りを主眼にするということは、自然の驚異に触れることによつて、まさに古来人間の本质として指摘されて来た性格を示しているのである。人間は驚くことを喜ぶ動物である（アリストテレス）。いずれもが、幸福のために行われている、と言い換えることができるだろう。

いま自然の驚異の話は別にして、健康問題だけを取りあげておこう。たしかにお湯の別府は健康の保持増進に有効である。高崎山から流れてきた猿も温泉に浸かってケッコウと言うらしい。そういう次第で、別府には医者に掛かっても治らない肝臓病が治るといつてもう何年も泊まり込んでいた。しかし——これはレジャー論の論じ方の本質的な部分に関わるのだが——人間の精神性を少し高め論じてみると、異様な光景を露わにすることになりそうである。

問題は自分の「健康」のこのみを重視する人と自分のことを勘定に入れずに他のために活動するという仕事名人の対比と言える。後者は彼の活動の意味・目的から生きる活力を得て、特別な保養などしなくても適当な休息を挟んで一年中働き続けて、なお健康を保ち長生きするのにも、前者は仕事を抛り出して健康のことばかり気遣いながら、一年中無益に湯治場で過ごすのである。この対比は特別な人間を拾い出して付き合わせたとして片づけてはいけない。多かれ少なかれこの対比は可能であり、一言で言うところ「精神と意志を健全にすれば温泉など必要としない」と言えるのである。

ところで温泉ツーリズムの仕掛け人は歴史、文化を挙げて、これを学ぶ観光というものがあるとしたのだが、残念ながらその側面は

極めてわずかでしかない。じつさい一遍上人はこの地獄観光の元興^②であり別府としてはどれほど感謝しても足りないほどの人であるが、石像は建っているも一遍が誰でありこれに学ぶにどのような意味があるか等は何も示されてはいないし、誰も興味は示さないのである。ここで「文化」と呼ぶのは絵画や音楽を指しているのだが、それはT・S・エリオットがいうような意味での文化ではない^③。人間が立派になると言う意味での元々の日本語としての「文化」でもない。つまり観光客、観光客が絵画や音楽を目当てにやって来るとしても、それは彼ら自身が絵を描き音を奏でて「立派になるために」^④やってくるのではなく、出来合いのものを鑑賞しに来るのである。鑑賞そのものは高次の人間的な活動でありえる（これはたしかに大事な押さえておくべきことである）が、残念ながらここで「文化」と呼ばれているものは芸術家たちの文化活動の残滓ではないのである。今日の文化人を気取っている多くの人に該当するであろうが、本来の文化活動は自分に甘くては成り立たないのである。

観光を企画する側において幸福を実現しようとするのには、そのほとんどの場合が金儲けというものに関わっていると云えるだろう。否、客の幸福実現のためである、と答えるなら、上の問題を通らねばならない。地域を健全化し、（というのには次元の高い課題なのである）活性化すると言っても、同じ別府の住人でもその余慶に与れない人がほとんどなのである。だが、これは少しも問題視するには当たらない。この人たちの方は老悪魔の手から免れ得ているのだからである^⑤。

②に関しては、このようにここまで否定的な取り扱いが多かったが、翻って考えれば、本来の観光概念に含めるべきことからへのヒントは多く得られたと言える。つまり、観光仕掛け人の意図してい

ないその先を我々は考えることができるのである。仕掛け人の意図はともかくとして、健康の保持増進を目的にする他に、歴史の中にさえあった「文化的側面」を我々は問題にし得る。一遍という人が活躍したらしい、それはどういう人物であったのか、と考える縁となれば（別府の例では白池地獄の南画館などよりも、一遍の事跡を紹介するものが欲しい）、彼の浄土宗を一步進めた時宗が、日本仏教の、否仏教そのものの、最先端に位置するものであることを、我々は学び得るのである。彼の足跡に従って（文字通りではない。精神のだ）宗教という形の文化を生き出すことが出来るのだ。生老病死すべてを受け容れる文化活動が、一遍の宗教であり、また極楽往生を願う心をも捨てるのが捨て聖一遍である。しかもそこには全ての人間の求める幸福が実現していると読める。

③ ③では「健康」「癒し」といったもの他に路地裏や湯の中でも観光客同士や地元の人間との新たな人間的な出会いが問題になった。「人間の出会いというのは、それ自体が人間の癒しにもつながるし、また文化交流の橋渡しにも役立っている」と私は述べた。しかしながら、我々が他国を廻国することによって諸国の生活形態を知ったり、各地で少しずつ異なる人情に触れたりして、知識も感性も豊かにする、というのはどういうことなのだろうか。他人の生き方を移入するようなことになる、自分の知らないで済んでいた悩みを知ることもなり、また知らぬうちに文化破壊、文化頹落の元凶ともなるであろう。そもそもよく考えてみると、そんな知識が実際に「人間の善さ」と何の関係を持つだろうか？知識は物の本にも、否、本にならばもつとキチンと体系的に書いている。書いていなくても情報収集すれば、先立つものさえ備わっていれば、自分で体系的に整理することも出来る。たしかに、実証主義が尊重される

今日であり個性が意味を持つことになっている。普遍的な知識よりも具体的な物、事柄を経験することが大事だと言われる。だが、反問してみよう。この個に何が見えているのか？そう問うだけで既に種が、そしてまた類が問題に上がっていることになる。

日本の秋の美しい景観を是非に味わいたい、と言う者があるでしょう。彼ないし彼女が、どれほど深く美を堪能し得るかということとは問わなくてよいだろうか。美を経験するということは、別の身近なことに引き当てて考えてみれば分かるように、訓練を要するのだ。ということは、それだけで既に美の経験の深さが立派に問題になっていることになる。そして、問題は「美」なのだ。——あくまでも類・種ではなくこの個が大事なのだというならば、どうしてこの個だけでよいのか、と問わねばならなくなる。かくてツーリストは夜に昼を継いで世界を巡らなければならなくなるであろう。際限なく、得るところもなく、疲ればかりが残るのである。

「人情に触れて形成すべきもの」という点も問題を残すであろう。その前に考えるべき事が何も考えられていなければ、形成されるべきものも形成されて居ないではないか、と。これに比しては、昔の人がやってきた「旅」は意味充足したものであったと思われる。「かわいい子には旅をさせよ」という。それは、旅は物見遊山ではなく、金を消費する行動ではなく、むしろ「給べる、つまり飲食物をいただく」であり、お貰い行為であった。それが人間形成に役立ったのだ。ここには、立派に、それなりの「行為の形」がある。

④ ④に対して次のようなことが指摘され得るのである。
 ここには、たしかに大事なことが述べられていると言えよう。「日常を非日常に変える」などというのは只者の言い分ではないだろう。そして、蜜柑園の話がほとんどであったが、このことは霊場

巡りにも該当するのである。彼はそういえば宗教的にも平素から日曜日には十キロほど離れた旦那寺の坐禅会に出席しているのである。坐禅会でもマンネリ化しがちなものがあり、寺廻りによって刺戟を受け気を引き締めさせられるというようなことがあるのだろうか。しかしながら、この話、どこかおかしくはないだろうか？人は空気なしには数分も生きては居られないにも拘わらず、平素は空気などどこにもあるから空気のありがたさを感じない。でも一旦公害などの空気汚染に出くわすと、そこで初めて平素空気を吸いながらその有り難さに気付かずにいることに気付く。そして、一難が去ったらまた空気の有り難さも忘れてしまうのだ。しかし、だからといって、また空気汚染を引き起こそうとか、汚染している地域に出かけようなどと思うだろうか？日常生活を「(気の)張り」を持つて過ごすことは善いことであろう。だが、その手段として同様な事例を外に見なければだめだというのは、まだその事柄に感激する程度も足りないし、方法的にまずいではあるまいか。それというのも、もし彼が坐禅の世界、つまり禅仏教で取り扱われていることがらを充分に知ったならば、蜜柑生産の作業の一端が、退屈ではあるが、もつともつと張りのあるものになるはずであるからだ。それだけではない。彼は坐禅をしていると述べたが、この坐禅そのものさえ、彼の主張が正当であるならば、何か別の同類の宗教活動をしようという見学して刺戟を得て活性化せねばならぬことになる。だがやはり変だ。他宗、たとえばキリスト教の教会に出入りしたり天理教の教会に出入りしたりせねば禅の価値が分からなくなるというのはい。

⑤ Cさんの言い分を善く洗い直さなければならぬ。③においては敢えて美や人情を求める者を批判的に論じて見た。しかしなが

ら、オーロラを見るために極北まで出かけたり富岳百景を堪能するために彼の地に留まり続ける人たちを、我々は美そのものの為に美を求める人と分類することを忘却してしまつてはなるまい。鑑賞対象が人間であつても同様である（ここに美がないというのでは小説は読めなくなる）。⑬の口、とした「芸術写真家」の話もここに纏めて論じることができる。ミレーの名を筆頭に挙げることの出来るバルビゾン派の画家たち、我が国の池大雅だの棟方志功らは、寝る間を惜しみ衣食住のためにする仕事に時間を取られることを拒み、貧窮の中に制作に励み美の来臨を第一にしたのだ。この制作活動を日曜陶芸家のそれとひとしなみにして、「文化活動の愉しみ」などと呼ぶ報道関係者に災いあれ、だ。

宗教、芸術、学問を含む文化活動を最も醇化したところには、およそ次の二つの性格が見て取れるものであると思う。一つは、その活動が自己目的になされるといふところから一步を進めて言えることであつて、《遊び》の性質である。宗教は遊びとは最も遠いと思われるかもしれないが、この《遊び》には存在の根源から来るエネルギーの爆発的湧出という朝鮮語経由の意味があるといふ考察をばさむと、納得を得られるであらう。禅仏教においてとりわけこの性格を認めることができる。今ひとつは芸術活動にしても学問にしても、その主体の単なる自由の発現というにはとどめ得ず、「自由」は「いからの自由」であるだけでなく「いへの自由」でもなくてはならないとすると、主体の側から言えば何者かに身を捧げるといふ性格が欠かせないであらうし、その捧げる対象の側からいへば至高の存在に即す活動でなければならぬであらう。

⑥ このオーナー、どうやら隠者らしい。それにしては先進的でもあり、大学生のインターンシップを受け入れて農業体験をさせたり

（講義も付いているらしい）、地域の土地や建物を宿泊者に貸し出すことができるように仲介したりしている。

最初の二泊は一泊五〇〇円だが、三日目からはシート交換はしないと、食事はこの家の平素の食事を出すと、その他基本的にセルフサービスにするだけでなく、居合わせたらオーナーの指示に従つて細々とした作業にも手を貸すといったことが付け加わつて一泊二〇〇〇円に値下げになる（枕カバーとシートを持って行けばただでも良いとも言われているらしい）。農繁期には遠慮会釈なく労働に駆り出され、それも体験させて貰ううちに入っている。

この事例では、ツーリストが自分の人生を見つめ直し、あくせくしなくて有りのままでよい、そういう善い人生というものがあることに気づき始めるというところに着目しなければならぬ。こういうツーリズムが幸福実現に向かう将来的・本来的なツーリズムと言ふことができるのではないだろうか。

⑦ 観光ファッション雑誌を片手に急ぎ足でもみじ橋まで来て、それに載っている写真と景色を照合して頷いて帰って行く安芸の宮島の観光客と比べて、このファニー・プライスのは何という落ち着いた光の観方であらう。これは夜景であるが、誰もがそれをみて厳肅さを感じまた慰められる訳ではない。心を喜びで満たされる訳でもない。光の観方の技術とでも呼ぶべきものがあるらしい。それは「我を忘れて眺める」というのだ。だが、それはまた何を言おうとしているのだろうか？ 前のページでファニーは「自己省察」の大事であることを述べている。その「自己」を忘れるといふのは、言い替えるならば「自己から離脱すること」となる。自己が自己から離脱するとき何が生起するか、というのはい問うに値する問いである。

ソクラテスの言葉として、次のようなものが紹介されている。「方々へ旅しても、それが君には無益であったことに君はどうして驚くのか、君自身を持って回っているのに？君を遠くに追い出したと同じ原因が、今も君の後を追っているのだ」(Seneca, Epist. 28)。ひとが旅行ないし観光をするのは何のためか、ということが問われている。多くの人は自分にとっての最も大事なものがつねに「今ではなく未来にまた此処ではなく他の場所にある」と思っている(然り、これが世人のツーリズムの中心にあるのだ)。しかし、セネカやソクラテスは否という。彼らは本当に大事なものは自分の内にあるというのだ。内に大事なものを見いだした者は、世界どころか近隣を経巡ることさえ無用とする。この思想がファニー・プライスにもあることになろう。

では、未来に、また他の場所に大事なものを求めて外を経巡るひとは、何を大事なものとして経巡っているのだろうか。積極的に見える事柄から先に挙げてみよう。「パリ旅行」、「バリ島観光」など魅力的な観光パンフレットが業者の手で無数に用意されている。今や正月を海外で過ごすということは、自分のステイタスの高さを人に見せびらかす絶好の選択肢となっている。で、この人たちが何を實際に手に入れてくるのかと想像してみるがよい。「不満」であろう。成田を出発するときと帰り着いてゲートを潜るときのみ、得意の頬が脹らむが、後は不満ばかりというのが、先のソクラテスの時代以来の旅の実情なのだ。おしなべて旅に何かのものを期待する者は虚無主義者であることに相場は決まっている。人生の真の拠り所などというものは無いと考えている者は、したがって概して鬱の気分にある。それはそうだろう、生きるということはしつかりした支えがあつて初めて愉しくなるのだ。で、その鬱を散じるためには

気晴らしが必要である、となる。それでは彼もしくは彼女は気晴らしを手に入れることができるだろうか？否！である。鬱の原因は自分であった。自己一人の身の処決が問題であった。しかるに、自己を成田に置き去りにすることは出来ず連れて出国するかぎり、原因を内に抱えての廻国となる。ソクラテスが「君を遠くに追い出したと同じ原因が、今も君の後を追っている」というのはそのことなのだ。

⑧ トルストイが民話や子ども向け物語で書いたものには、二つの論点があつたように思われる。一つはこの作品にも明示されている「隣人愛」であり、使徒ヨハネの思想である。エルサレム詣もまるで無意味である訳ではないがゆえに、エリセイ老人も気持ちよく家の仕事を切り上げて、必要な金を工面して出かけたのだ。だが、エフィーム老人とははぐれ水を飲みに寄つた百姓家の無惨な様子に放つてはおけず、残る旅費をほとんどつぎ込んだのは、老人の隣人愛、汝自身と同じように汝の隣人を愛せよ(マタ、22:39)の思想というよりも放つておけないという感情そのものなせる業であった。しかし、トルストイにはもう一つ大事な側面がある。それは、とにかく人が自分自身と向き合うことが出来ることによつて神とも対話することの出来る状態を「幸福」と呼ぶ、そういう思想である(『イリアス』など見よ)。この側面が、この巡礼物語で神を拝する巡礼の旅をするのはエルサレムまで出かけなくともよい、神はおのれの内に住み給う、という仕方でも描かれているのだと思われる。それはこの作品の冒頭に引用された「ヨハネ福音書」の句からも見て取られる通りである。

⑨ 先にはまず芭蕉の「おくの細道」の冒頭を挙げたが、次に来る「笈の小文」にいう「其貫道するものは一なり」とは何であり、

「見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれ」とは何であるのか？芭蕉の俳諧は単に自分の心に映る自然の花月を眺め歌に詠む作業ではない。⑤に触れた最も醇化した芸術ないし文化の活動である。花を見るときは花の他を見ず、月を見るときは心が月に醇化するのだから、労苦がある。そうでなければ鳥獸に同じく夷狄に墮すというのである。そして最後に、「造化にしたがひ、造化にかへれ」という。造化とはその時々、花、月と人の心を生み出す根源的な創造の働き、神的創造の働きであろう。だから、それにしたがひそれへと帰れというのは、花月を見るときに、それをそこに置いて自然の根源たるものを自覚し、そのものとして活動せよ、というものだ。と理解しなければならぬだろう。

芭蕉は不易流行という言葉を持つていたらしい（贈其角先生書など）。もし彼の弟子たちが、右の「其貫道するものは一なり」がいずれも仏教（禪）であることに注意を払い、芭蕉の俳句の構造をよく理解し得ていたら、「不易流行」が指し示していた事柄が何であるかは、容易に特定できていたであろう。

いま、筆者の言わんとするところは芭蕉の俳論ではない。彼の旅論である。彼の旅は日々の生活であり、したがって家居していても旅にあつたとさえ言えるのだ。そしてその日々の生活は造化にしたがった発句の制作であつた。だから彼自身、一貫してみごとに家郷に居るではないか。そう言いたいのだ。

これをもう一度転じてみると、次のようにも言えようか。目的無く行われる旅である。それは自分の故郷から出発してどこまでも親

に伴われて続けられる旅である。芭蕉という人は旅に旅した人であつたが、そして日々の生活も、たとえ家にあつても行き交う日々は旅であつたが、彼の旅は家郷にあつてなされる旅であつたのだ。

⑩ 雲居の返答の「この山の麓に、古い寺の地所があります」は、残念ながら見所を外れている。彼の問いは、大方のツーリストに問うのには間に合うが、古強者の趙州和尚には不足だ。だから、趙州は、

「お前さんは、なぜそれを自分のものにしなないんかい？」と問うてやつているのだ。

雲居に見識があるならば、「趙州和尚はいい歳こいてるんだから、当然本来の居所を見つけているはずだから、そこに居ればいっただろう」という挨拶の仕方をすることができただろうに。

ところが雲居寺の和尚は違つていた。まさに、趙州を覚者として扱つてゐる。人間本来の居所を問うているのだ。趙州は、先と同じ挨拶の仕方だが、雲居の和尚は先とは違う。「和尚さん、お前様のお寺は向こうですぞ。さつさと帰んなされ」などとは言わぬ。

「この老僧は、呆けて、自分の居所をわからんわい。」という言葉が、的確に其処を指し示している。趙州もそれを諒解するのだ。

長々と蛇足を加えたが、ツーリズムを考える者はこの手の文献を嫌つてはいけないうだろう。旅する人は、本来何処に向かつてか旅しているのだ、ということが此処にはあるのだからだ。——ただし、そういう舌の根の乾かないうちから、ここには難題のあることが明らかになる。この手の文献を使いながら旅、廻国の本来の目的を考へる場合、非合理の世界、言葉では言い表せぬ世界が中心に坐るのであるから、目的もまた無目的の目的としか言えなくなってしまうのである。

⑪ ⑪については、次のように言わねばならない。どうやら禅では、ものの真相を見るということは、世間の人が考えているような素朴な仕方での、「外界にものがあつて、それがカメラのレンズに擬えられる水晶体を通つて網膜に倒立像を結び、その刺戟が神経を経て大脳に達する」というようには見えないようだ。先にも触れたように、人生の一大事とか本物というものは、常識が当然のように受け入れられているものを徹底的に否定してしか捕まえることはできないらしい。

「この一株の花は一株の花ではない、だから一株の花なのだ」

しかしながら、こう言うのも言葉だ。この言葉の奥にあるものを掴まないことには、先には進めない。しかも厄介なことには、老婆心を働かせてさらに説明を加えようとすれば、さらに人を困惑に落とし込むことになるらしいのだ。

だが、此処で少なくとも明らかにしていることは、南泉には、目覚めている者には見られねばならないソレがあるということである。先にオーステインの作品の主人公には見えたらしいことに触れた。へたなツーリストは靴の底を磨り減らして世界を巡らつても、ソナモノは影すら掴むことも出来ず、人生を浪費することになるのだ。

因みに鈴木大拙は、『禅と精神分析』（東京創元社）で、禅と科学のものの理解との差異を述べて、芭蕉の

よくみれば 薺はなさく 垣根かな

を挙げている。彼は、芭蕉は禅的なモノの見方を身に付けていた、と解しているのである。

⑫ 一遍の思想は、浄土宗西山派の「安心決定鈔」のもつ、人間の意思のことは全て如来の決定し給うところであるという考えによつ

ている、と言える。彼の棄てる思想、ついには棄てようと言う思いすら棄ててしまうその思想は何であつたろうか？彼が旅に生を過ごすのは、持たないことの端的な実践であつたであろう。だが何故持たないことを選ぶのかというのは、さほどに難しい問題ではないだろう。持ったならばどうなるか、と自問してみればよい。持ち物に心を遣るならば、その問おのれに向こうから（一遍はむしろ内からと言うであろう）来ている仏の命を忘れることになるのだ。

⑬ 『老子』こそは周行論のオリジナルテキストと呼ぶべきであり、その規模は宇宙大をさらに超えている。混成した物、つまりカオス的なものが常の道とされ。玄と呼ばれるのだが、今このテキストでは道が道わずして周行するという。道が周行することによつて、天地および天地の間の諸物が生成するので、この周行こそが天地万物の創造の母とされるべきだ、と言うのである。

こんな旅行論、こんなツアー論が他にあるだろうか。だが、この周行論を含み得ないでは、とてもまともなツアー論だとは言えない。

しかるに、『老子』は今度はこれを踏まえて、聖人を道行ききの主人公として、玄なる道に観点を据えてものを見ることが出来る聖人は、周行だの旅行だのという疲れない運行をしなくても充分に知り、見なくてもはつきりと見、何もしなくても成すことができるのだと言う。芭蕉の旅の原理がみごとに述べられていることになるだろう。ついでながら俳論に触れると、芭蕉が老子の道を行つたならば、発句など作らなくて済んだだろう。惜しいことだ。

⑭ イ、「確認旅行」として、筆者は既に⑦において好例を示した。じつさいに、筆者が宮島で経験したことだ。紅葉と花火は水で見よというように、宮島の紅葉は「もみじ橋」で川に降りて行く

と、陽光を透かした朱色が川面に反射して一面の空気が朱に染まっている。だが、そこに居るのは筆者と連れのみ。ここに三十分ほど留まって、どうしてあの多くの観光客は降りてこないのか不思議に思い橋に上がってここでまた立ち止まっていると、納得！だ。若い女性が多かったが、そのほとんどは手に観光雑誌を持っており、それを抜けてもみじ橋の写真と照合して「ここだ、ここだ」と頷いて、満足して引き返して行く。まさに「カタログ通りかどうか確認に来た」というところである。

だが、これは何を意味するのだろうか。「美の体験」というのは、一切欠如している。彼女らには、海外版でも国内版でも世界遺産でもコアラでもパンダでもいいのだろう。スルト、金額の掛けようで評価も変わると思われているだろうが、この確認作業が彼女らの職場、学校での話題になり、彼女の価値を左右すると思われるのである。つまり、ここにも観光が自分の名譽心といったもののために為されている、と言えようか？

観光したということが自分の価値を高めるといふ錯覚は、観光のみにとどまらず、学問、芸術、文化のいずれにおいても指摘されねばならない錯覚だろう。彼らのやっていることは往々にして、そのこと自体を目的にしてやる、というのではない。だからその場合には、「味わい尽くす」ということはそこにはないのである。

ハ、センチメンタル・ジャーニーに対しては、⑦の末尾を参照されたい。

⑮は「観光」が金まみれになる唯一の例だと思ふ者も少なくないであろう。筆者もそう思つて聞いた。しかし少なくとも筆者は、これで初めて観光庁が金を目当てに設立された役所であることを知つたのであり、十年前の小泉宣言がそういう趣旨の宣言であつた

ことを知つたのである。それ以降、「観光論」に触れる度に、観光とは金づくめのことがら、ゴールデン・ツーリズムであるという感を強くして行つた。日本観光学会会長大橋昭一氏の諸論文を見よ。

⑯ カインが「逃亡の放浪」をしたということは、彼が神（存在の根源）から面を避けたということの意味するであろう。ということは、彼においては神という無限・絶対的な価値に向かつて生きるということが欠落したということであつた。ただし、ここで注目しなければならぬのは、カインがそのことを、つまり「地上の放浪者であること」を自覚していたということである。自分がそのようなマイナス価値にあることを自覚している者は、絶対価値をも自覚しているということである。彼には救いの可能性が多分に残っている。そして、事実彼も「神に生かされた」のであつた。小説「カインの末裔」は極悪人を描いているようであるが、カインは悪魔に魅入れられ通した訳ではない。老悪魔の手下となつて活躍し続ける人々とは区別されなければなるまい。

ペドロ・カスイ・岐部については不明なことがあまりにも多い。彼を本来の観光の旗印にするにしては、彼を直接の対象にして学ぶのではなく、彼を動かした本体を主体にして学ぶがよいであろう。

註

1、たとえばカール・ヒルティ『幸福論』みよ。人間が人生の意味をどう考えるかによつて、自分の人生を長くも短くもする動物であることは、V. フランクルの沢山の著書が示している通りである。

2、一遍上人は別府の地獄を極楽に変えたと言われる。筆者は別府の極楽を地獄に変えようとして見られるかもしれない。

3、TS・エリオットの本来の文化として指摘する内容は、「宗教的なものの受肉」（『文化とは何か？』（深瀬基寛訳、清水弘文堂刊）第一章に

- 4、人間的に立派になるとはいかなることか？ソクラテスは知らぬと言う。
- 5、トルストイ『イワンのばか』参照。怖い話だが、トルストイによれば、観光業者のほとんどは老悪魔の手に落ちていくことになるのである。
- 6、この際、文化 *cultura* が「魂の耕し」であると同時に「崇敬」であるという筆者の見解（「大分県立芸術文化短大紀要」一九九六年三十四巻八頁）が生きてくるのだが、この着想の元にあるセネカにおける *beata vita* が *natura* に即して生きることであるという指摘は大事であろう。真の観光をする人は幸福な生を生きているのだ。
- 7、日本人では間違いないそう言うてよいだろう。ただ、西洋では伝統的に「希望」とか「期待」というものには——あのセネカの場合とは別の文脈であるが——人生の拠り所の問題が絡まっていたのである。「ローマ人への手紙」534。
- 8、これが「流行にして不易」ではなく、「不易にして流行」であることに注意せねばならない。

第三節、ツーリズムの本質

「はじめに」で八割方は片づいたようなものだと言ったが、少し手の込んだ見解を引き合いに出したことによって、私は厄介な問題を背負い込むことになったらしい。だが悲観するには及ばないだろう。

①から⑬まで挙げた観光、ツアー、廻国、などを主題にした事例の中で、⑬の一部を別にすれば、そこで述べられている人間の行為はいずれも幸福という至高善をめざす行為だと結論づけることができると思われる。だが、議論の展開を分かり易くするために、事例を二群に分け、議論を深めることにしたい。

(1) 行為の形

Tourism という行為の本質、何であるか、を明らかにする作業というのは、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』VI巻で述べているように、基本命題を求める帰納、普遍的なものへの帰納である（1139b30）。だがひとは、ものの何であるかを明らかにするのは定義をすることであり、「定義」は近縁の類を種差によって限定することによって得られる、とするようである。少なくとも、定義を以て「ものの何であるか」を示そうとする。もし当面の近縁の類の定義が求められたら、さらに普遍的な類を見つければよい、として。だが、このやりかたで最も普遍的なもの（最高類）を見出したとしても、(哲学史上極めて稀なトマス^①の例を除外しては)最も原因的なものを指し示していることにはならない。行為の本質として、行為の不可欠の原因を示すことはできない。われわれは観光に関して書き上げられた事項の逐一から予め本質を洞察して、それを総合するという手順によって、観光という当該行為の持つ意味をより大なるものとする、そこに来ている原理的な働きを明らかにしな

ければならない。

①から⑤までの事例および⑭⑮を振り返ると、そこにはさし当たりツアーの目的とされていることがらが、自分の名誉心を満たすこと、食の快、健康ないし健康に生きる快、金銭等から、人間の自己形成、ある場合には超越的な美の経験といったものまでに広がっていると見える。われわれはこれをアリストテレスに倣って、すべて「幸福」を実現しようとする行為と捉え、すべてのツアー、観光活動はこの一旦は究極的と呼ぶことの出来る目的に帰着させることができる。

ところで、観光活動だけでなく人間の全ての行為を支配している棟梁的「目的」として我々はこの「幸福」を挙げることができないのだが、「幸福」の概念ほど多様でしかも吟味を要するものはないと言える。なぜ吟味を要するか。その理由の第一に挙げるべきは、それらの「幸福」概念に基づいて幸福な生を実現させようとする、ほとんどの場合が狙った状態とは真反対の事態（安心、喜び、満足を得られず不安、不満足、怒り）を結果し、ほとんどの場合は自分が虚無に浮かんだ不安な存在であることを暴露されて終わる。そしてその理由は、人間のもともめる最高の状態（⑥）行く、善く生きる）は「無条件に最高に価値あるもの」を手に入れた状態であるべきであるのに、ほとんどの人はそういうものを知らないし、問題にもしていないからであることが分かる。だが、多くの人間が誤って最高に価値あるもの（⑥）最高善。神とはそういうものであると考えられる）を金銭や権力や名誉というものに求めているとしても、彼らが何らかの意味で最高善である神を求めていることは否定できない。

したがって、多くの人はそれを自覚していないとしても、一般的

に、ひとは最高の善をめざして行為しているのであり、観光活動、ツアーもそうなのだと見える。ここから、「ツアーとは最高善を求める活動である」と言うことができるし、ツアーの本質は神であり「最高善である」と見える。むろんツアーを観光、廻国、旅と言い換えてもよい。

一般的な観光、ツアーでは「最高善を求める活動」に他と区別を設けて、モノの自然（いわゆる自然だけでなく人間もまた自然である）に相対してそこに神を觀ようとする（得ようとする）。「活動」と言う方が分かり易くなるだろう。そして、分かり易くなるついでに、モノに相対するときそのモノにいろいろな形を見ることができることによって、人は自分の目先を変えられ、目先を奪われ本来の観光を損なってしまうのである。

つまり、その最高善というものは、「識られざる神」であるから、多くの人間が目的系列においてその手前にある富や権力、名誉、快、健康といったものを手に入れることによって妥協してしまうのである。この場合、或る人にとっては金銭が圧倒的な存在感を以て価値ある物と写り、或る人には権力がそのようなものとして写るといふことが生起していると言える。この（神が視野から消えた）状態をユダヤ教・キリスト教の伝統では「罪」と呼び、罪が擬人化されたものが悪魔である。そしてたとえばトルストイが『イワンのバカ』で老悪魔を描いているのは、このような下書きがあつてのことであつた。いずれも行為としては欠落態である。ただ、イワン（と後に彼の細君）のみが（彼が神とどのように関わったかについては明示されては居ないが）神と正対したことは否定できない。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』冒頭の人間の行為の目的手段の連関は、このように受け取られる。

もう一度具体的な事例を振り返ると、①～③および⑭のイ、ハ、また⑮はそれぞれへの洗い直し文章を挟んで考えると、いずれも形ある何ものかに捕らわれているという点において、行為の完全な形態を備えていない。窮極的な目的でないものをあたかもそれであるかのように思いなしている点で錯誤がある。悪魔の手に墜ちていると言ひ替えるのは少々酷であるかもしれないが、当人たちが真面目であればあるほど戲画的な性格が強くなるのは避けられない。④は微笑ましい話とすることができ。旅行そのものにしても坐禅にしても目指すべきものを的確にそれとして掴んではいないためにこのような話になるのだが、何者かに魅入られているというような性格の事柄ではなく、時間的、金銭的余裕を持って余していると言えば済むところであろう。ただし、この④は論じ返すに値する内容を含んでいる。それは次項で論じよう。これら以外の⑥～⑮の項目は、いずれも何らかの仕方で造化の自然に従った見事な内容を展開していると見られる。この点もまた、次項によって総合されるものなのである。

(2) 上の行為の形は、実は不充分であり、神、最高価値はそういう形では捉えられないこと

アリストテレスに即して「行為の形」を構造的に論じた。たしかにこのような目的志向的な仕方では、ほとんどの人が何らかの形ある行為を選択する、と言えるのである。だが筆者はこのような構造においてはもはや行為を捉えることは出来なくなっている。キリスト教が端的に別の行為の形を教えるのであるが、アリストテレスの研究からであっても、この形を打ち破る行為論が出てこなければならぬことについて、筆者はもう何年も前から主張している。それを

ここで再論する。

(1) での行為の原理である神は、今日の多くの人においては行為の目的として意識の対象とならないことによって否定される。ここに虚無思想があることになる。しかし、神は万物の存立原理であるということからも万物と同じ性質のモノ(何某かの限定されるモノ)ではありえない。つまり、認識の対象たりえないものである。そういうものが「行為主体↓行為↓行為の目的」という線上に位置づけられる訳がないのである。

そこで、各々が行為において少なくともこう言えるという仕方では「責任を持つて言えること」を書き留めると、一つには行為においては確かに自分が行為主体としてそこに居ること。行為として何らかのことが私の意識の対象としてそこにあること。第三に、その形あるものをなすのは、何かは定かではないが、それが「善いからだ」という理由によって、あるいは「善さ」という名に動かされて行うのであること。この三つである。

いま、金銭を目当てに何某かの行為をする者を例に取ってみると、言い方を変えれば、金銭が彼を動かし(目的因、作動因、形相因)一つの行為を形作らせるのである。さらに言い直すと、金銭が金銭を目当てにこの行為をする主体を存立させると共に、金銭を目当てにしたこの形ある行為を存立させるのである。金銭を目当てに廻国したり、廻国者を接遇しようとする者は(それ以上のものが見えないこと)によって行為の欠落態に陥っているのであるが、金銭に使われているのである。

だが、何か識らぬ者の声を聞いて行為に及ぶ者も確かにあり、その場合は彼自身はアリストテレスの行為図のように対象世界に神的存在があるかのように思いなしているとしても、実際には「全く別

の次元の世界から、行為主体であり行為の対象を意識する意識主体である彼自身と、その意識および行為の対象であるものとを同時に存立させる働きが存在している」のである。神とは、また仏とはそのような働きのことを指すのである。⑬の『老子』のテキストが語る「周行」はこの神による創造のプロセスを語る、特異例である。いずれにしても、人間の意識存在およびその対象世界は、すべてそのようにして存立させられているのである。このことを理解すれば、ひとは全てを神の働きに委ねるほかに、委ねることによって安心立命を得るのである。その対応の仕方によっては、人間としての最上の活動である幸福が実現する。

④の廻国者がいまひとつ不分明曖昧な態度しか取れなかったのは、この状況が明確に捉えられていないためであった。⑤以下の事例の中心に座っている思想は、いずれもこの意識主体たる人間と意識の対象は神仏によって（キリスト教の場合にも仏教の場合にも）一対がその都度作り出される、と言いつつ表すことができるものである。⑥は民泊宿のオーナーがそのような考えの持ち主であると思われる。「天国は既に来てここにある」（マタイ、32:11、「ここ」というのはこれであり、⑫の一遍上人の見解も、またジェイン・オーステイン⑦もトルストイ⑧、芭蕉⑨、禅の坊主⑩⑪さえも、このような思想の中に含めることができるであろう。様々な経緯によってこのような世界の構造に開眼した者は、根源的な存在に自らを委ねると同時にこの根源的存在の創造の業に即して生きる（造化にしたがい、造化にかえる）ことを彼の生の形として選ぶことになるであろう。ここには自由があると同時に服従がある。

このようにして、筆者は行為主体の目的志向の図において、究極目的たるものを同一線上に置く構造を一旦否定した。しかしなが

ら、「究極目的」をアリストテレスがそうしているように人間における魂の最高の活動である幸福にありとするならば、我々のツリズムはいずれもやはり幸福を目的とする活動であると考えることができる。⑩に言うように廻国の目的が無目的の目的であるとしても、行者の境地としてそのような魂の活動を目的としている、と言えるのである。⑬の前半部分のみは、他と性格を異にするが、しかしこうした根源的事態が後半部の主張を支えているのであり、⑦で触れた「内に大事なものを見出した者は、世界どころか近隣を巡ることさえ無用とする」理由となっているのである。

以上のような人間の行為世界の構造（意識ないし意思と意識対象とそれらを存在させる神仏の三者構造）の故に、人は彼が何を志向しているとしてもこれは神がそのように働かせている限り「悪い」働きではあり得ない。その限りで人間はいつでも天国に居るのであり幸福であると言えるのである。ただ、行為の主体である人間の意思が如何に実現しているかということを問題にした場合には、先ずその意思が神仏の働きがこのようであることを自覚して働くのではない場合には、神仏の働きを喜び迎える（＝感謝する）というあり方ではない。その限りにおいてここには神の意志と人間の意志とが協働するというあり方になっていないのである。この場合には、人はおのれがそういう働きをしていることが幸福であることを受け入れないために、在らぬ処で幸福を実現しようとし、あらゆるところにおのれの神を立て（財神、権力神など）可能な限りにむさぼろうとするのである。

ここに神仏の働きを迎えて安心の裡に生きる人は、廻国をする際に何を目的にするであろうか。自分が満ち足りているのであるか

ら、そうでない者のように物欲しげに物欲り歩くことはない。ただ兄弟ともいえる人々との協働を図るために歩くだの兄弟の幸福を増進させるために（というのは、先ずは幸福な状態にあることを宣告して）歩くのだといったことではない。あるいは、人であることの何らかの欠陥のために（生活の必需品である食料、水、空気などに欠ける場合がある）歩く場合もあるであろう。あるいはさらに、一遍が捨てることをも捨てるということをやったように、人であることに安住して敢えて根源的存在者を求めて生きるということすらあるのである。人をさして「旅する者・人間」というような場合はこれである。芸術家の場合には、とりわけそういう問題が入ってくるであろう。芭蕉が、家居しながら廻国することのできる芭蕉が、敢えて廻国するのは風光を味わいながら芸術表現をするためであるといえる。画家が、また音楽家が同様にして芸術の着想を得ることもあろう。

註

1、しかし、観光学界では、大橋昭一氏のいう観光の定義「人々が風物や名所を訪問したり、気晴らしや保養のために定住地場所を一時的に離れて行う自由時間における消費活動である」や、彼が紹介する海外のツーリズム論では、こんなふうにもやられていない。

2、知恵を例外にしては、プラトンの『エウテュデモス』の吟味に引っかけからず済む（善いもの）などないと言っても善いのだ。

3、アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』では後に第VI巻で、人間が宇宙における最善なものではないことを認める（七章）。無条件に最高善と言えるのは究極目的たる神のみであることになる。

4、これを裏側から言えば、神に動かされていることになる。その点については、次に（2）で述べる。

5、人間の活動の完全性を以て究極の目的とする立場においては、アリストテレス的に「幸福が究極目的である」と言えるのだ。

第四節、ツーリズムの類落態

以上のようにして、人間の行動形態の一つである「観光」ないし「ツーリズム」も、究極の人間のあり方である「幸福」を求めて歩くことである。このような目的志向的行動である。いいかえると「観光」ないしツーリズムはこのような目的によって形作られているのである。しかしながら、全ての人間の目指すところはその完成態であるとしても、ひとがその完成態を実現するように行動するかどうかはその都度の彼らの選択に掛かっている。

いま、人間の完成態を実現する行動と、それを実現し得ない行動とを対比してみると、前者は目指すところを何らかの仕方で掴んでいるのに対して、後者はそれを掴んでいない、ないしは忘却している。この状態を古人は当に旅における「道草」に喩えた。この一種牧歌的な趣をもつ喩えはともかくとして、実人生においてはそのあり方は「類落態」と呼ばれなければならない。観光ないしツーリズムにおいても、我々はまともなそれと「類落態」とを明らかにしておかなければならない。さらに、問題としなければならぬのは、この道草である。人はなぜ道草をするのか？道草が愉しいからだ。そこに長く留まっただけはこの旅程が妨げられるにも拘わらず、つい時の過ぎるのを忘れる（「人生は短い」と嘆息せざるを得なくなる）。ここにも細やかな選択の連続があり選択するのは本人であることに変わりはない。またこれをしも根源的存在の予定・予知、元起こしに因るのだと開き直ることもできる。その限りでは然したる問題ではないのかもしれない。

だがここに道草を敢えて設^{しつら}える者が居るとすると、これは頹落態を敢えて引き起こす者、他人の行動形態を破壊する者である。これは単に文学の世界のことと済ませる訳には行かない由々しきことではないだろうか。これは観光、ツーリズムを支える周辺に位置する人間の事柄であって、ここで従来はごく有り触れた景色でしかなかった事柄が、全く異なった色調を以て見られることになるであろう。これもまた、まともなツーリズムと頹落的なツーリズムの違いとして指摘することができる。

そして、最後に問題にされるべきは、この頹落的ツーリズムであって、今日の政府機関まで関与して鳴り物入りで推し進められているものはほとんどがこれに属するのである。もし「文化」という語をその本質的なものから論じ直すならば、彼らこそまさに文化を崩壊させる者であるのだ。彼らの進める国策は、今日世界が直面している温暖化問題、化石燃料・資源の枯渇問題をさらに悪化させる反社会的施策であるとともに、反道徳的施策でもあるのだ。

こうなると私は、今日の観光業を幫間、売春婦の業に喩えたくなくなる。それは決して「本来の観光」業を呼んでいるものではないのだが、そんなことがどうであろうとこうであろうと関係なしに、これを不謹慎と咎めたくなる人たちもいるであろう。だが、筆者はすでに本稿において世間に通用している観光業が大方において頹落態であることを否定のしようのない仕方⁵で指し示し得たのではないだろうか。

筆者の取り扱う「倫理学」が人間の行為のあるべき形態のカタログではないことよって、筆者と共に安心してこの観光倫理学に胡座をかき向きも多分出てくるであろうが、トルストイ『イワンのばか』の老悪魔、小悪魔、旧約『エゼキエル書』の遊女、姦婦

(16:15-43) など、無数のテキストが、観光業を含めた多くの人間の業を極めつきのマイナス評価語で呼んでいる。それは人間の正しさというのが、神に知られ、人間として最も幸福なあり方であるが故にこそ、その頹落態を最も厳しい言葉で指弾することになっているのだと思われる。

註

1、アウグスティヌス、DOCTRINA CHRISTIANA, 1:3:3.

2、ここでは国法を犯すという問題はない。しかしながら、人間としての高い理想を拉ぐ^ひ所業は単なる犯罪よりもっとおぞましく、したがって古くから悪魔の名を冠せて呼ばれてきたのだ。

3、教育において恐るべき頹落態が生じるとき、よくよく考えてみるとそこに政府の関与がある。ニートが問題だという。彼らの人格的発育阻害が心配されているとばかり思っていたが、なに、政府が口を出すのは、ニート・フリーターが税金を納めない、年金基金に穴があくことを心配しているのだ。「ゆとりの教育」なるものが始まる。たしかにドリル学習は生徒をバカにするだけだ、考える力は閑暇の中で育まれるはずだ。しかし実際に問題になっていたのは貿易黒字問題の解決策として導入した週休二日制であった。児童・生徒の真に健全な発達など、教育基本法をテンから問題視していないこの国の文部行政の人たちにおいては何の興味も惹かないのだ。

4、プラトンが『ゴルギアス』において弁論術に対して見せる矚みに做った表現。外に現れる形として言えば、じっさい、公職に就く者を辞職に追い込む売春婦が、ひとたび観光業者の手に掛かれば、高級コルガール・花魁の行列となり、下に置かぬ喝采を博すことになる。精神の形としては「もてなし」という語が流行語にまでなっているが、言葉ばかりが虚しく先走りして、業者は少しも主をすることを

知らない。「以て為す」とは「以て客と為す」か、「自らを以て主と為す」の何れかであろうが、主 dominus を為すことは彼らにはできない。servus pecuniae 金銭の奴隷でしかない者には、人を以て客と為すことはできないのだ。

5、ここに一人の学生が居てホテル業に従事しようと言っている。しかし、彼をそれをもって直ちに幫間業志望者と決めつける訳にはゆかない。種々の事情があつて特定の地域で特定の職場を得て世間の認める仕事をしようとしているだけで、彼自身は幸福問題はずでに解決済みで、自分は僅かな報酬を得ながら機会があれば幸福に迷いウロウロしている人を見つけては道を示したいと思つていたりしたら、これは立派な業務であると高く評価せざるを得ないだろう。しかしまた、彼がそこまで物分かりがよいのであれば、第一節⑥の天国園の主人公の手伝いをして日を過ごすという方向は、もつと充実した人生を実現することであろう。

むすびにかえて

本稿をほぼ書き終えたときに、たまたまラジオで、湯布院観光の生みの親と言われているらしい溝口薫平氏と中谷健太郎氏の話聞いた。筆者とは年代も立場も異なるが本稿と共鳴し合う考えが多いことに気付かされた。

まずは、時代のせいというものもあるのかもしれないが、この人たちの活動は、小泉宣言の遙か以前、田中角栄首相の列島改造内閣に對抗するように生まれた湯布院のコミュニティ作り運動であり、そのことが直接にマモンの支配を免れているという点を挙げなければならぬ。じつさい、彼らは塚原湿原をゴルフ場にしようとした別府資本をはね除けるために闘争し、湯布院の牧草地を別荘地に変

えようとする大手資本をはね除けたのだった(今日、年間の話題に必ず入ってくる湯布院「牛喰い絶叫大会」はその結果生まれたイベントであるらし)。

観光庁は彼らを「観光カリスマ」に祭り上げて利用しているが、湯布院は余所と異なり、錬金術を第一には決してしなかった。そうではなくて、先ず第一に生活ないし生活圏の防衛(その相手こそ錬金術師たちであった)であった。彼らの絶妙なコンビネーションを追ってみると、最初は中谷氏が大いに実力を発揮し、この湯布院のコミュニティがものを——「倫理性」すらも無視して自由に

——考え発言するという仕掛けをしている。この間は溝口氏は素知らぬ顔でグライダーを決め込んで空に浮かんでいたらしい。それでは二十年ほども要したか、コミュニティが活性化したところでは、中谷氏の本源的自由人(ホゲホッポー)的な言動に加えて溝口氏の抑制の利いた言動が光ってくる。この抑制というのは、少しでも考えてみれば分かるように、「則すべきもの」がなければあり得ない働きである。当人がその何であるかを自覚しているか否かは別として、そのようなものが人に働いてくるのだ。本論で筆者は述べたが、宗教、芸術、学問を含む「文化」という極めて能動性の高い活動には、何者にも制約されない自由を求める働きと、即すべきものに則すという服従の働きとが共存している。この人たちの活動は、そういう意味で優れて文化的な活動と呼ぶべきものなのである。

このところ、二人の具体的な話が実に面白い。中谷氏が自由を尊重するのは生まれつきのようだが、それは権威を打ち壊し打ち壊して成り立つものだという。湯布院が有名になる、ジャーナリズムの祭り上げるところになる、皆の衆はそれを喜び、ジャーナリズムの作り上げた「理想像」に安心しこれを固守しようという動きに

出る。中谷氏はぶち壊しを言い為す。ここで彼らには理想がないのだ、虚無主義者だというのは間違いであろう。道楽に対しても「ルール作り」をしようとするのである。